

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

池松 孝子

幕末から明治にかけて日本政府や各府県によって雇用された外国人を「お雇い外国人」といい、富国強兵、殖産興業を勧めるため技術系外国人を雇用了。ラフカディオ・ハーンはいわゆるお雇い外国人ではない。1890年（明治23）、アメリカの出版社の通信員として来日した。尊敬するジャーナリストの『清潔で美しい日本』を読んで文明に汚染されていない日本に憧れたからだという。当時英訳された『古事記』にも強く惹かれた。来日後、英語教師として松江、熊本、神戸、東京などで尽力した。

熊本大学には旧制五高時代の歴史的記念物がたくさん残っている。熊本大学歴史散策マップを手に、五高の寮歌や嘉納治五郎の碑など歴史散策を楽しむことができる。表門は旧制五高時代の門で旧豊後街道に面している。五高の英語教師をしていた夏目漱石が詠んだ句もある。当時、門を入ると一面、蕎麦畑が広がっていたという。

いかめしき門を入れば蕎麦の花

漱石

さらにラフカディオ・ハーンの碑もある。これは1894年（明治27）に行なった講演「極東の将来」の結びの部分で、日常生活において無用の贅沢と浪費を憎むというもの。簡素な生活、素朴な精神は、熊本に赴任する前に住んでいた松江の武家出身のセツ夫人との生活から受けた影響も大きい。また出雲の風土、歴史から日本人の精神を汲み取ったのだろう。西欧の伝統文化に負けないものがあるのを見たのだ。

ハーンと言えば、『怪談』を思い浮かべる。「耳なし芳一」「雪女」「むじな」など、古くから我が国に口承で伝わる説話を記録し、広めた。私たちもそれらから日本人の風土、歴史、日常生活を感じ取ることができる。

昔、読んだハーンの『日本の面影』を取り出してみた。弘法大師の書、鎌倉・江の島にて、美保関にて、八重垣神社とあたかも彼の日本巡礼であり、ハーンを感じた「美しい日本の姿」「失われゆく日本」が紹介されている。